

# 東洋文庫所蔵本に押捺された蔵書印について（十七）

— 歌人・俳人・詩人の蔵書印 —

中善寺 慎

## 既刊連載目次

- 一 朝鮮本に押捺された朝鮮の蔵書家の蔵書印 書報35号
- 二 僧侶・寺院の蔵書印、附神官・神社の蔵書印（上） 書報36号
- 三 僧侶・寺院の蔵書印、附神官・神社の蔵書印（下） 書報37号
- 四 国学者の蔵書印（上） 書報38号
- 五 国学者の蔵書印（下） 書報39号
- 六 漢学者・漢詩人の蔵書印 書報40号
- 七 学校・教育機関の蔵書印 書報41号
- 八 医家・本草家の蔵書印 書報42号

- |    |                  |        |
|----|------------------|--------|
| 九  | 大名・藩主とその家の蔵書印    | 書報 43号 |
| 十  | 幕臣・藩士の蔵書印        | 書報 44号 |
| 十一 | 戯作者・操觚者・新聞社の蔵書印  | 書報 45号 |
| 十二 | 商賈・実業家・企業の蔵書印    | 書報 46号 |
| 十三 | 近代の学者・教授の蔵書印     | 書報 47号 |
| 十四 | 図書館・博物館とその周辺の蔵書印 | 書報 48号 |
| 十五 | 政治家・官僚の蔵書印       | 書報 49号 |
| 十六 | 欧米人の蔵書印          | 書報 50号 |

## 凡 例

- ・ 印影は縮尺任意の単色写真である。
- ・ 印文の縦の寸法をミリメートルの数字で掲げた。
- ・ 複数の資料に該当蔵書印を見い出せるものは、印影を採集した資料名に\*印を付した。
- ・ 資料名につづけて、請求記号を丸括弧に包んで付した。
- ・ 蔵書家の伝記などは主として次の資料に依った。

市古貞次「ほか」編『国書人名辞典』

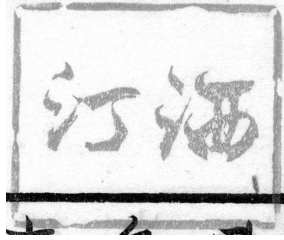
井上宗雄「ほか」編『日本古典籍書誌学辞典』

国立国会図書館編『人と蔵書と蔵書印』

平凡社編『日本人名大事典』

『和歌文学大辞典』古典ライブラリー刊

・配列は、印記所有者のよみの五十音順とした。



秋元酒汀（一八六九—一九四五）

明治・大正・昭和前期の俳人。本名は平八。幼名は半之助。別号に濡鷺堂。明治二年（一八六九）下総国葛飾郡流山の素封家に生まれる。明治十六年家督を継いで醬油醸造業を営む。翌年上京し二松学舎に学び、明治二十三年東京専門学校を卒業。在学中より俳句に親しむ。秋声会に加わり、角田竹冷・伊藤松宇・岡野知十と親交、『秋の声』のち『卯杖』同人。文芸雑誌『山比古』、ついで地方俳誌『平凡』を発刊。自転車愛好会「曙輪友会」の会長を務め、また、流山鉄道の設立に尽力した。美術愛好家としても知られ、日本美術院の設立を後援し、横山大観、菱田春草らを経済的に支援した。大正後期からの不景気により蒐集品の殆どを手離し、昭和二十年（一九四五）没。流山の光明院境内に葬られる。句集『胡沙笛』、著書に『在五中将』『小野小町』がある。

「酒汀」（30）

『誹家大系図』（VII—17—1—1009）



有賀長因（一七二一—一七七八）

江戸時代中期の歌人。正徳二年（一七一二）京都生まれ。有賀長伯の子。名は泰通、長川。号は長因、有隣、敬義齋。父長伯に和歌を学ぶ。加藤景範の尽力で大坂折屋町に移り、大坂歌壇を指導した。安永七年（一七七八）没。墓は大坂高津の本覚寺、のち枚方市田口山に移転。和歌宗匠としての有賀家は、長伯―長因―長取―長基―長隣と続く。長因の大坂行きに際し景範が奔走したことは、岩崎文庫中の『釈澄月書簡』（四―C―一―一）によって知られる。掲出印は、奥書末に捺されたもの。

〔□通□印〕（27）

『詠歌大本秘訣』（三―F―a―へ―五四）

\* 『春樹頭秘増抄』（三―F―a―へ―六三）

『和歌之題』（三―F―a―へ―六三）

〔敬義齋〕（32）

『春樹頭秘増抄』（三―F―a―へ―六三）



有賀長基（一七七七—一八三三）

江戸時代後期の歌人。安永六年（一七七七）生まれ。大坂の人。号は義慣斎。有賀長収の養嗣子。有賀長隣の父。養父有賀長収に学び、歌学をついだ。加藤景範の曾孫の礼文に古今伝授。天保四年（一八三三）没。墓は大坂高津の正法寺。編著に「からのやまとの歌」がある。

「長基」印は、奥書末に捺されたもの。「飛角一硯田」印は、その関防印。

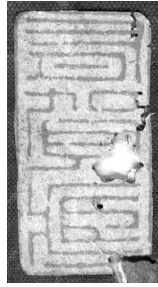
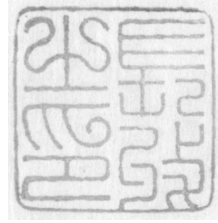
「長基」（20）

\* 『詠歌大本秘訣』（三―F―a―へ―五三）

『詠歌大概安心秘訣』（四―C―一四）

「飛角一硯田」（23）

『詠歌大本秘訣』（三―F―a―へ―五三）



有賀長収（一七五〇—一八一八）

江戸時代中期の歌人。寛延三年（一七五〇）京都に生まれる。初名は長因、のち長収。号は生志斎、居貞斎。有賀長因の養子となり、家学を継いで詠歌を修めた。父に従い大坂折屋町に移り、加藤景範に和歌を学ぶ。大坂歌壇で活躍し門人多数を擁する。文政元年（一八一八）没。墓は大坂高津の正法寺。歌集『雲樹集』、文集『居貞斎文集』がある。

掲出の「長収之印」印は、奥書末に捺されたもの。「有賀藏」印は捺印の紙片を表紙に貼っている。有賀家代々の襲用か。

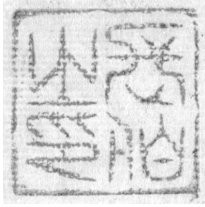
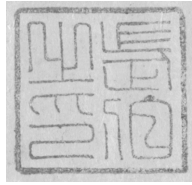
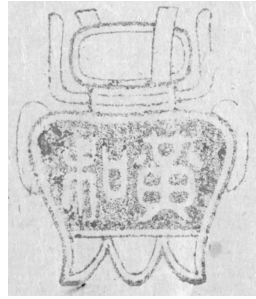
「長収之印」（27） 『諸号読曲』（X—五—A—一〇〇七）

\* 『百人一首訓読清濁』（三—F—a—へ—五〇）

『春樹頭秘増抄』（三—F—a—へ—六三）

『和歌之題』（三—F—a—へ—六三）

「有賀藏」（35） 『百首歌合』（Ⅶ—一—K—d—四）



有賀長伯（一六六一—一七三七）

江戸時代中期の国学者・歌人。寛文元年（一六六一）京都の医家に生まれる。名は長伯。号は以敬斎・無曲軒・黄和・六諭。有賀長因の父。松永貞徳の門流で、初め望月長孝に、ついで平間長雅の門に歌道を学ぶ。晩年、大坂難波に住む。二条家流歌学の普及に貢献し、京阪における地下歌壇興隆の先駆となる。有賀家の七部書といわれる入門書を公刊し、歌道の大衆化に大きな役割を果たした。元文二年（一七三七）没。墓は大坂高津の正法寺、また京都東山の頂妙寺。歌文集に『秋葉愚草』などがある。

掲出印は、奥書末に捺されたもの。

「黄和」（37） 『伊勢物語秘々註』（三―F―a―i―一―五）

\* 『詠歌大概安心秘訣』（三―F―a―i―二―一）

『八雲神詠秘訣』（四―C―一―九）

『階梯之秘訣詠方口訣』（四―C―一―二）

「長伯之印」（22）

\* 『詠歌大概安心秘訣』（三―F―a―i―二―一）

『階梯之秘訣詠方口訣』（四―C―一―二）

「長伯之印（大）」（25） 『八雲神詠秘訣』（四―C―一―九）





有賀長隣（一八一八—一九〇六）

幕末・明治期の歌人。文政元年（一八一八）大坂に生まれる。有賀長基の子。号は情新斎、思繼斎。家学を継承し上方における堂上派地下歌人の指導者として活躍した。柿本人麻呂を尊崇し、脱俗高踏の風があった。徳島藩士。長男に国際法学者の長雄、次男に三井合名会社の長文がいる。夫人勝子もよく歌を詠んだ。緒方洪庵と交友があり、種痘普及にも尽力した。晩年は東京府麹町区三番町に移り、明治三十九年（一九〇六）没する。墓は青山墓地。歌集『竹の下枝』がある。

掲出印は、奥書末に捺されたもの。

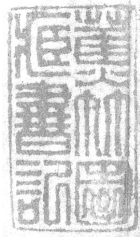
岩崎文庫中に散見される有賀家伝来手鈔本は、有賀長雄（一八六〇—一九二二。号は帚川）の旧蔵という。『先代相伝書類及歌書類』（VII—2—K—1—10—14）には「帚川」印が見える。

「情新斎」（24）

『春樹頭秘増抄』（三—F—1—1—16—3）

「長隣之印」（24）

『春樹頭秘増抄』（三—F—1—1—16—3）



市河寛齋（一七四九—一八二〇）

江戸時代中・後期の儒者・漢詩人。寛延二年（一七四九）上野国甘楽郡大塩沢村の生まれ。市河蘭台の子、市河米庵の父。初め山瀬氏。名は世寧。字は子静・嘉祥。通称は小左衛門。号は寛齋・半江・江湖詩老・西鄙人・西野・玄味居士など。蕉竹園・蕉竹書屋はその書齋号。早くから江戸に出て昌平齋に学び、朱子学を修めた。初め父蘭台につき、ついで、関松窓、大内熊耳に学ぶ。昌平齋學員長に補せられる。文学的な資質に恵まれ、漢詩人としての活動に本領があった。天明七年（一七八七）には神田に江湖詩社を設立。柏木如亭、菊池五山らを教え、写実的な新詩風を確立し江戸時代後期の漢詩壇に大きな役割を果たした。寛政異学の禁を批判し、寛政二年（一七九〇）昌平齋を追われる。翌年越中富山藩に招かれ藩校広徳館の教授を務め、また掛川藩世子の侍講を兼ねる。細井平洲・井上金蛾など交流も広い。編著に『日本詩紀』『全唐詩逸』、著書に『寛齋摘草』『随園詩鈔』などがある。文政三年（一八二〇）没。墓は江戸谷中本行寺。

『蕉竹園臧書記』（30）

『本草綱目』（XI—三—A—c—二三）



市島屏山（一七九三—一八四六）

江戸時代後期の儒者・漢詩人。寛政五年（一七九三）市島元中（号は白雪）の次男として越後国新発田に生まれる。家は代々商を生業とする富豪で、越後国北蒲原郡水原の大地主市島家の一族。市島岱海の甥。名は泰。字は交通。通称は秀松。号は屏山、追蠡。質屋、酒造業などを営む。梁川星巖に学んで詩にすぐれ、琴や書もよくした。丹羽思亭と親交があった。弘化三年（一八四六）没。墓は越後国五十公野天神山。著作に『追蠡集』。

『追蠡子鑑賞章』（31）

『市島泰交通印』（22）

『大広益会玉篇』（XI—二—一八）

『大広益会玉篇』（XI—二—一八）

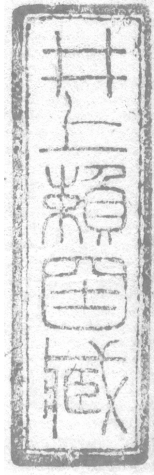
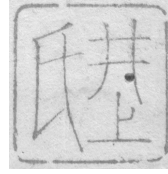


井上通泰（一八六七—一九四一）

明治・大正・昭和前期の国文学者・歌人・眼科医。慶応二年（一八六七）儒者松岡操の三男として播磨国姫路元塩町に生まれる。民俗学者の柳田国男・言語学者の松岡静雄・日本画家の松岡映丘は弟。号は南天莊。明治十年（一八七七）医師井上碩平の養嗣子となる。明治二十三年帝国大学医科大学を卒業。岡山医学専門学校教授などを経て明治三十五年東京で眼科医を開業。森鷗外とも交友があり訳詩集『於母影』に参画。和歌を松波資之に学び香川景樹に傾倒、以後生涯にわたって歌道にいそしむ。明治三十九年には歌会「常磐会」を設立。翌年、御歌所寄人となり勅任官待遇となる。還暦を機に医院を閉じ古典研究に専念し『播磨風土記新考』等を著す。また、万葉集の研究に業績があり『万葉集新考』を残した。医学博士。宮中顧問官。貴族院議員。芸術院会員。昭和十六年（一九四一）没。墓は東京多磨霊園と兵庫県神崎郡福崎町の観音寺にある。歌集に『井上通泰詠草』『南天莊歌集』などがある。蔵書は大東急記念文庫に収蔵される。

「南天莊」（18）

『名物六帖』（E10311・ニイイト〇一〇〇11）



井上頼圀（一八三九—一九一四）

幕末・明治期の国学者・歌人。天保十年（一八三九）医師井上頼正の男として江戸神田松下町に生まれる。本姓は源。名は頼圀。幼名は次郎。字は伯随、厚載。通称は大学、肥後、鉄直。号は一賀、英玉翁、呉竹亭、神習舎。幼少より学問に親しみ、犬塚義章に漢学を学ぶ。安政三年（一八五六）相川景見に就いて歌学を修め、文久元年（一八六一）平田鉄胤の門に入り国学を学ぶ。元治元年（一八六四）権田直助に古医道を学び、慶応三年（一八六七）には京に上り権田を助け国事に奔走する。明治維新後は、皇漢医道御用掛、教部省権大録・大講義、大神神社少宮司を経て、明治十年に宮内省御系譜掛を命ぜられる。私塾神習舎を開くかたわら、皇典講究所設立や『古事類苑』編集などに努力した。その後は、国学院講師、華族女学校教授、学習院教授、宮内省図書寮編修課長、六国史校訂材料取調主任などを歴任。文学博士。大正三年（一九一四）東京麹町に没す。墓は東京青山墓地。著書に『後宮制度沿革考』などがある。旧蔵書は東京町田の無窮会神習舎文庫に現存する。

〔井上氏〕（21）

〔尚古造紙挿〕（II—1—E—1—〇六五）

〔井上頼圀蔵〕（61）

〔尚古造紙挿〕（II—1—E—1—〇六五）



上田元疆（生没年不詳）

江戸時代後期の歌人・医師。生没年未詳。文政―嘉永年頃（一八一八―一八五四）の人。上田元矩の三男。名は元疆。通称は誓阿、松斎。号は誓斎、弄瓦軒。大坂の本町に住まう。享和三年（一八〇三）加藤景範の門に入り、和歌を学ぶ。香道にも秀でた。

掲出印は、奥書末に捺されたもの。

「元疆之印」（26）

\* 『詠歌大本秘訣』（三―F―a―へ―五三）

『詠歌大概安心秘訣』（四―C―一四）



大野酒竹（一八七二—一九一三）

明治期の俳人・医者。明治五年（一八七二）大野東の長男として熊本県玉名郡弥富村に生まれる。名は豊太。酒竹は俳号。七歳で上京し、第一高等中学を経て帝国大学医科大学に進み、皮膚科泌尿器科を専攻。在学中より俳諧に興味を持ち、佐佐醒雪らと筑波会を創立し、角田竹冷・尾崎紅葉らの秋声会に参加、博文館に勤めて「俳諧文庫」を刊行した。大学卒業後、京橋区木挽町に大野病院を開設。医業のかたわら古俳書の収集を継続し、俳諧史研究に努めた。著書に『俳諧史』『与謝蕪村』などがある。荻窪に俳諧研究図書館の建設を企図したが、果たせないまま大正二年（一九一三）没。墓は東京青山墓地。旧蔵書の大半は酒竹文庫として東大総合図書館に収蔵される。

「酒竹文庫」印は生前に捺された蔵書印ではなく、みだりに古書肆の捺印したものである。

「酒竹庵」（25）

\* 『茅窓漫録』（II—E—一七五）

「酒竹文庫」（44）

『さるげんじ』（三—F—a—ろ—一六）

\* 『古今和歌集』（VII—K—b—四一）ほか



岡本保考（一七四九—一八一七）

江戸時代後期の書家。寛延二年（一七四九）上賀茂神社の  
 祠官岡本保起の子として山城国愛宕郡に生まれる。賀茂眞主。  
 通称は弁之助、房千代。号は方円齋、淪読齋。治部大輔と称  
 した。岡本邦氏、花山院常雅より大師流書法を授かる。一条  
 忠良に仕え諸大夫となり、明和四年（一七六七）従六位下中  
 務少録、ついで正四位下甲斐守兼治部権大輔に進み、安永八  
 年（一七七九）書博士に任ぜられる。能筆の誉れ高く、紫宸  
 殿や承明門の扁額などに書が残る。また和歌を能くした。文  
 化十四年（一八一七）没。上賀茂の河原墓地に葬る。

『岡本家』(29)

『也足軒素然集』(三二F一a—一—)

『保考』(13)

『也足軒素然集』(三二F一a—一—)

『□〇齋藏書』(43)

『也足軒素然集』(三二F一a—一—)





岡本保孝（一七九七—一八七八）

幕末・明治初期の考証学者。寛政九年（一七九七）旗本若林包貞の次男として江戸に生まれる。幕臣岡本保修の養子。名は初め孝、のち保孝。字は子戒。通称は縫殿助、勘右衛門。号は況齋、順台、歳計堂、拙誠堂、戒得居士、麻志天乃屋。清水浜臣の門人となり国学を学び、狩谷掖齋・日尾荆山に漢学を学び、音韻・考証に通じた。学問の範囲はひろく、国書・漢籍・仏典の諸書に及ぶ。維新後は大学の中博士となり、のち編輯寮に転じ『語彙』の編集に従事した。著書に『況齋雑話』、随筆に『難波江』などがあり、蔵書家としても知られた。明治十一年（一八七八）東京小石川柳町の居に没す。墓は東京浅草東国寺。蔵書は次男友二郎の家にあつたが、その後散逸。東洋文庫に『岡本況齋著書』（三一E154）が収蔵されるほか、静嘉堂文庫に『岡本況齋雜著』、国立国会図書館に『況齋叢書』が伝存する。『東洋文庫書報』八号〜一〇号に榎一雄「岡本保孝のこと」。

掲出書は、岡本保孝の自筆本で木村正辞旧蔵書である。

〔岡〕（8）

『淮南子校本』（三二C144）



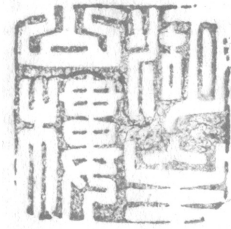
落合直文（一八六一—一九〇三）

明治期の歌人・国文学者。文久元年（一八六一）陸奥国本吉郡松崎村に仙台藩重臣鮎貝盛房の次男として生まれる。幼名は亀次郎、のち盛光・直盛。国学者落合直亮の養子となり、名を直文と改める。号は桜舎、萩之舎等。伊勢の神宮教院に進み、堀秀成に国史・国文を、植松有園に和歌を学んだ。二松学舎を経て、明治十五年東京大学古典講習科に入学。のち皇典講究所講師、第一高等中学校などで教鞭を執る。『日本文学全書』刊行など国文学者としての業績のほか、「青葉茂れる桜井の」「孝女白菊の歌」の作者として知られる。森鷗外に協力して訳詩集『於母影』に参画。短歌革新を目ざして浅香社を結成、与謝野寛ら多くの歌人を育てた。明治三十六年（一九〇三）東京本郷区の自宅に病没。墓は東京青山墓地。著「萩之家歌集」「ことばの泉」など。

「落合氏藏」(27)

『唐ものがたり』(VII-21D-1-18)

\*『類聚国史』(X-51B-1-044)



小野湖山（一八一四—一九一〇）

幕末・明治期の儒者・漢詩人。文化十一年（一八一四）近江国浅井郡高畑村の医師横山玄篤の長男として生まれる。名は巻、長愿、字は懐之、士達、舒公。通称は仙助、侗之助。号は湖山、晏斎、狂々老夫、玉池仙史、侗翁。賜硯楼の齋号がある。天保元年（一八三〇）梁川星巖に入門。翌年江戸に出て藤森弘庵・尾藤水竹らに儒学を学ぶ。嘉永四年（一八五二）三河吉田藩の儒官となる。藤田東湖らと交わり国事に奔走し、安政の大獄に連座。幽囚に際し小野と改名する。維新後は太政官権弁事に任ぜられるが、のち辞して詩作に専念する。詩名高く明治三詩人の称があり、詩集「湖山楼詩鈔」などの著がある。明治四十三年（一九一〇）没。墓は京都市右京区花園の妙心寺大竜院。  
掲出印は序文末に押された落款印である。

「湖山楼主」（29）

『尊攘紀事補遺』（E二二〇・五八〇カ〇一〇〇二）

「長愿之印」（20）

『尊攘紀事補遺』（E二二〇・五八〇カ〇一〇〇二）



梶曲阜（一七九九—一八七四）

江戸時代後期の俳人。寛政十一年（一七九九）撰津国伊丹に生まれる。通称は大和田屋金兵衛（今平）。号は曲阜、照顔斎、松の本。幼少より俳諧と尚古に興味があり、酒造業を営むかたわら、伯耆国の杜城に俳諧を学ぶ。上島鬼貫の句風を慕い、伊丹俳壇の指導者として知られる。安政三年（一八五六）二条家より官服の免許を得た。明治七年（一八七四）没。墓は伊丹の杜若庵。著作に『照顔集』などがある。子の孫貫も俳諧を能くした。

〔照顔書屋〕（27）

\* 〔四方の硯〕（II—E—二四四）

〔北窓瑣談〕（II—E—二五一）

〔湖亭涉筆〕（II—E—二〇〇四）

〔ほうまん長者〕（VII—F—二八）

〔諺草〕（VIII—C—二四）

〔殊号事略後編〕（XI—H—一〇二四）

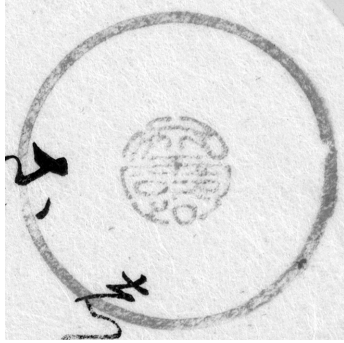
〔桜雲記〕（三—H—一七）



加藤千蔭（一七三五—一八〇八）

江戸時代中・後期の歌人、国学者。享保二十年（一七三五）加藤枝直の三男として江戸に生まれる。本姓は橋。初名は佐芳、のちに要人。字は徳与磨、常世磨。通称は常太郎、又左衛門。号は朮園・芳宜園・耳梨山人等。狂号橋八衢。家職を継ぎ、町奉行組与力勤方見習、奉行所吟味役与力などを勤める。幼時より父枝直に歌を学び、延享元年（一七四四）賀茂真淵に入門、国学・和歌を志した。村田春海と並称され「江戸派」と呼ばれる。また書を能くし、千蔭流の祖。画や狂歌もたくみであった。家集『うけらが花』『万葉集略解』等の著書がある。文化五年（一八〇八）没。墓は江戸本所の両国回向院。蔵書は枝直・千蔭の父子二代が築き、直蔭・千年・直道と継がれ、直種の代に散逸したといわれる。

『橋氏蔵書』（57） 『七十一番歌合』（三―F―a―へ―七）



川西和露（一八七五—一九四五）

大正・昭和期の俳人。明治八年（一八七五）神戸に生まれる。本名徳三郎。県立神戸商業学校を卒業。鉄材商を営み、神戸市会議員を務めた。河東碧梧桐に師事。大正三年（一九一四）から俳誌『阿蘭陀渡』を発行。古俳書の蒐集家としても知られ、その蔵書によって『蕉門珍種百種』『和露文庫』が翻刻・刊行された。昭和二十四年（一九四九）没。句集に『和露句集』がある。没後、蒐集した古俳書は天理図書館に収められた。神戸市立図書館には明治以降の俳諧関係活字本五七〇冊が収蔵されている（大正十三年寄贈）。

「和露」（42）

『万家人名録』（VII—171—1010\*）

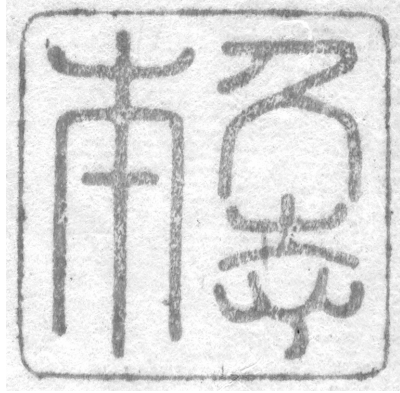


北村季吟（一六二四—一七〇五）

江戸時代前期・中期の国学者・俳人・歌人。寛永元年（一六二四）北村宗円の長男として山城国粟田口に生れる。名は静厚。通称は久助。号は七松子、拾穂軒、湖月亭、蘆庵、呂庵など。祖父宗竜、父宗円とも近江国野洲郡北村の医師であり、連歌をよくした。医学修業のかたわら、俳諧・和学・和歌を松永貞徳に、歌学を飛鳥井雅章に学ぶ。和漢の学に通じ、多くの古典の注釈書を著す。天和三年（一六八三）京都新玉津島神社の社司。元禄二年（一六八九）烏丸光広に推され幕府に仕官し、長男湖春とともに歌学方となる。元禄十二年法印に叙せられ、再昌院の院号を賜わった。門下に素堂、芭蕉などがある。宝永二年（一七〇五）江戸に没す。墓は江戸下谷池之端の正慶寺。俳論書『埋木』、歌集『季吟子和歌』、『徒然草文段抄』『源氏物語湖月抄』『枕草子春曙抄』など多くの注釈書がある。

「拾穂之印」（25）

『道の記』（四—C—八）



久志本常彰（一六七五—一七五二）

江戸時代前・中期の神職、歌人。延宝三年（一六七五）伊勢外宮権禰宜河崎延貞の次男として伊勢国度会郡山田官後町に生まれる。本姓は度会。幼名は延守。名は常昭、常彰、用直、閑直。通称は四郎次郎、縫殿、主馬。号は鶯谷・芸亭。外宮祠官久志本継彦の嗣子となる。詩文・和歌・書画・俳諧・茶等を究めた。冷泉為村・林信篤等と親交があり、桜町天皇の御前で『日本書紀』の講義をした。著書に『神道明弁』『日本国風』等がある。宝暦二年（一七五二）没。墓は伊勢国山田の養草寺。

「久志本」（49）

『枯杙集』（II—E—1025）





少汝（一七五九―一八二〇）

江戸時代後期の俳人、俳諧作者。宝暦九年（一七五九）尾張国愛知郡名古屋に生まれる。法諱は了栄。号は少汝、少如、松叟、花癖。名古屋本重町の大谷派寺院、黒部山常瑞寺の第七世住職。初め田中道磨に国学を学び、のち寛政四年（一七九二）本居宣長の教えを受ける。安永四年（一七七五）暮雨巷暁台の門に入り俳諧を学び、尾張五老の一人と称される。酒を愛し細事に拘泥せず、多趣多芸で、謡曲・儒学・鞠・平家琵琶・挿花・香道・漢詩・茶道・茶道・楊弓・義太夫などを嗜んだ。文政三年（一八二〇）没。墓は名古屋の常瑞寺。編著『印譜略』がある。

掲出印は、識語末に捺されたもの。

「寄傲」（19）

『絵本富加美草』（三―D―b―二八）

「了栄之印」（18）

『絵本富加美草』（三―D―b―二八）



滝沢羅文（一七五九—一七九八）

江戸時代後期の俳人。宝暦九年（一七五九）滝沢興義の長男として江戸深川に生まれる。名は興旨。幼名は松沢左馬太郎。通称は佐太郎、直次郎。台（大）右衛門。号は可楼、羅文、東岡舎。曲亭馬琴の兄。越谷吾山に俳諧を学ぶ。安永七年（一七七八）旗本戸田下総守忠諏に仕え、のち旗本山口和泉守直良に仕え大坂に赴く。寛政十年（一七九八）没。墓は江戸小石川の深光寺。

この印を滝沢羅文のものとする説には疑義もあるが、今は措く。

「滝沢氏図書印」（20） 『回国雑記標註』（XI—五—C—九九）

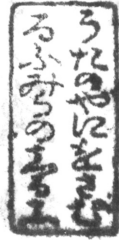


田沢仲舒(?—一八五〇)

江戸時代後期の歌人、医者。生年未詳。出羽の人。幕府医官田沢保久の子。名は仲舒。通称は駒平、宗伯。号は宗沢、流水、流水園。兄は医者の奈須恒徳。幕府寄合医師を務め、江戸日本橋箱崎町に住す。村田春海、加藤千蔭に学んで和歌を能くした。嘉永三年(一八五〇)没。著書に『医家奇賞』、家集『流水藁』などがある。

「函碕文庫」(40)

『松陰日記』(X—五—I—一〇—一)

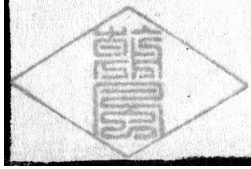


土屋老平（一八四一—一八八七）

幕末・明治期の歌人、郷土史家。天保十二年（一八四一）  
武居世平の次男として上野国群馬郡高崎町に生まれる。通称  
は補三郎。号は和堂、歌の屋。狂名は二代重庵石文。俳号は  
多胡石文。土屋氏を嗣ぐ。歌を橘冬照、橋本直香に学び、父  
とともに高崎藩主大河内輝声の歌道師範をつとめた。明治二  
十年（一八八七）没。高崎町の安国寺に葬られる。和歌・文  
章のほか、地誌に詳しく、著に『片岡郡志』などがある。

「うたのやにおさむるふみらのしるし」（31）

『大坂物語』（三―A―d―九）



堤朝風（一七六五—一八三四）

江戸時代中期・後期の幕臣。歌人、国学者。明和二年（一七六五）江戸生まれ。名は朝風。通称は文五郎、三五郎。号は竹裏亭、不占、正心斎。本居宣長に国学・歌道を学ぶ。新井白石に私淑し、平田篤胤とも親交があった。賄組頭を務め、幕府の故実学に詳しく、蔵書家としても知られる。天保五年（一八三四）没。墓は江戸牛込七軒町の浄林寺。著作に『古学道の枝折』『柳営年中行事大成』、編著に『近代著述目録』などがある。

〔朝風〕（20）

『南洋無人島図』（XI 五—C—四六）



内藤露沾（一六五五—一七三三）

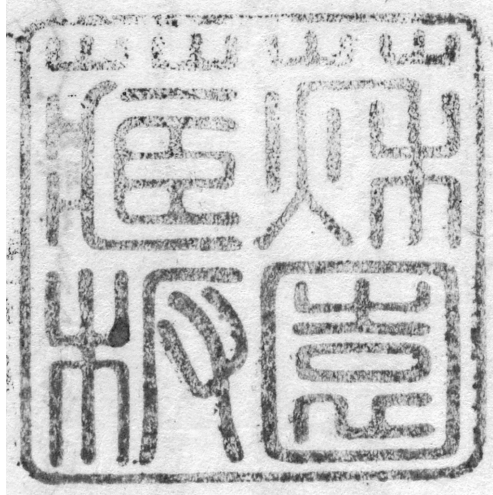
江戸時代前期・中期の俳人。明暦元年（一六五五）陸奥国磐城平藩主内藤義泰（義概・風虎）の次男として江戸赤坂溜池の邸に生まれる。幼名は五郎四郎、鍋之助。名は義英、のち政榮。号は露沾、傍池亭、遊園堂。寛文十年（一六七〇）従五位下、下野守に叙任される。兄義邦の死去で世継ぎになつたが、讒言により天和二年（一六八二）廃嫡。以後は江戸麻布の自邸で風流を専らとした。和歌を武者小路実蔭に学び、俳諧は宗因門であるが、父の薫陶を受け、季吟・芭蕉・其角らと交遊があつた。門人に水間沾徳・菊岡沾涼らがいる。歌集『露沾公詠草』がある。元禄八年（一六九五）磐城平の高月に隠棲。享保十八年（一七三三）没す。墓は磐城平の善昌寺、また相模国鎌倉の光明寺。

〔贖庫〕（36）

〔四書集註〕（三〇一—一六）

〔露沾〕（12）

\* 〔玉滴隠見〕（三〇一—一六）  
\* 〔四書集註〕（三〇一—一六）  
\* 〔玉滴隠見〕（三〇一—一六）

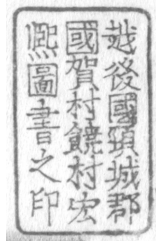


夏目甕磨（一七七三—一八二二）

江戸時代後期の国学者、歌人。安永二年（一七七三）遠江国浜名郡白須賀の酒造家で名主役の家に生まれる。通称は小八郎・嘉右衛門。名は英積、甕磨（瓶磨・甕満・三日丸）。号は茂竹笹好、萩園。加納諸平の父。笠子学園に学び、内山真龍・本居宣長・同春庭の門人で古学を修めた。寛政二年（一七九〇）家督相続。文化十一年（一八一四）隠居。文政元年（一八一八）『鈴屋大人都日記』等を出版。家集に『志乃夫集』、著書に『古野之若菜』などがある。地名の語学的研究に関心をもち、文政五年（一八二二）摂津国に客死する。墓は三河国吉田の普門寺、また摂津国伊丹正覚院。掲出の「萩園蔵板」印は蔵版印。

「萩園蔵板」（62）

『鈴屋大人都日記』（VII—1—E—1—〇）



饒村宏熙（一八五五—一八九八）

明治期の漢詩人。越後国頸城郡国賀村の人。安政二年（一八五五）代々里正を務める家に生まれる。父は饒村京藏。子は彬成。諱は宏熙。字は子循。通称は常作。号は柳涯、痴仏居士。名望家で高額納税者に名を連ね、村会議員、郡会議員などを務め、地域に尽くした。明治三十一年（一八九八）病没。詩文を好み、著に『柳涯遺稿』がある。

〔越後国頸城郡国賀村饒村宏熙図書之印〕（30）

\* 『清嘉録』（II—二一八〇二）

『周礼』（E—I—五—B—一〇〇二）





西田思明（生没年不詳）

江戸時代後期の漢詩人、商人。生没年不詳。字は子壯。通称は嘉兵衛。号は華洲、頼古堂。大坂の人。商売の傍ら文雅を好み蔵書家としても知られる。

「頼古堂印」(22)

「頼古堂家蔵」(29)

『感旧集』(IV-116〇)

『埤雅』(I-91A-四)



忍頂寺務（一八八五—一九五一）

明治・大正・昭和期の実業家、俳人。明治十八年（一八八五）忍頂寺国郎の長男として淡路国津名郡志筑町に生まれる。俳号は木筆。洲本中学校を卒業し、神戸の商社に勤務。歌謡研究家としても知られ、関係書のほか、洒落本・地誌・細見なども蒐集した。三田村鳶魚ら江戸研究者とも親交があった。著書に『清元研究』がある。昭和二十六年（一九五二）没。蔵書の一部が、忍頂寺文庫・小野文庫として大阪大学附属図書館に現存する。

「忍頂寺蔵書章」（18） 『後家集』（三）F・a・はーウー七九



林子平（一七三八—一七九三）

江戸時代後期の経世家。元文三年（一七三八）幕臣岡村良通の次男として江戸に生まれる。名は友直、字は子平。通称は定治。号は六無斎。叔父の林従吾に養われ、林姓を名のる。仙台藩伊達家に仕えた兄嘉膳に従い宝暦七年（一七五七）仙台に赴く。その後しばしば江戸に遊学し大槻玄沢・宇田川玄随らと交遊があった。長崎遊学で見聞を広め海外事情に通じ、沿岸防備と蝦夷地開拓の必要性を説いた。寛政四年（一七九二）著書『三国通覧図説』『海国兵談』が幕府の忌諱に触れ、板本没収のうえ禁錮に処せられた。寛政五年（一七九三）不遇のうちに病没。墓は陸奥国宮城郡仙台の竜雲院。他に『六無斎詩歌集』などがある。

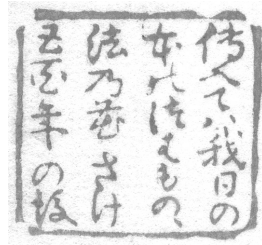
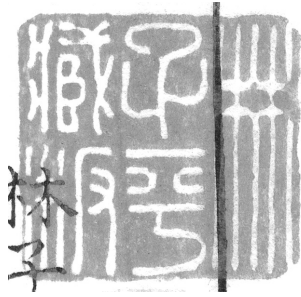
「千部施行」（52）

『海国兵談』（XVI—1—C—1—16）

「伝へては我日の本のつはもの、法の花さげ五百年の後」（30）

「林子平蔵板」（35）

『海国兵談』（XVI—1—C—1—16）  
『海国兵談』（XVI—1—C—1—16）



掲出印三顆はいずれも、流布本の多くに共通して捺されているので、蔵版印として使われたものようである。



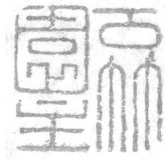
日野資時（一六九〇—一七四二）

江戸時代中期の公卿、歌人。元禄三年（一六九〇）侍従豊岡弘昌の子として京に生まれる。本姓は藤原。号は楚蘭、瑞光院。元禄七年叙爵し侍従に任じ、のち宮内少輔、右兵衛佐を歴任する。享保三年（一七一八）早世した日野永資の養嗣子となり日野家を嗣ぐ。享保七年参議兼左大弁、同十三年権大納言となる。賀茂社伝奏をつとめた。詩歌・画をよくし、『日野資時詠草』がある。寛保二年（一七四二）没。従一位に陞叙。

藤原北家日野流の嫡流である日野家は、家格は名家（旧家）、和歌と儒学を家職とする。江戸時代の家禄は千百五十三石で、弘資や資枝のような和歌の名手を出し歌壇に重きをなした。明治十七年（一八八四）資秀の時に伯爵となる。宮内庁書陵部に日野家本が収蔵される。

「日野藤資時蔵書之印」（51）

『礼記』（三一A—一二二）

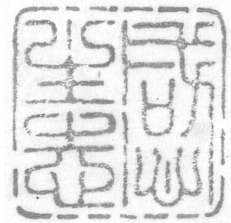
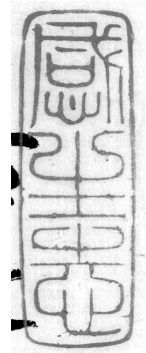


平野五岳（一八〇九—一八九三）

幕末・明治期の僧侶、漢詩人、画家。文化六年（一八〇九）豊後国日田郡渡里村に生まれる。名は岳、聞慧。字は五岳。号は竹邨、古竹園、方外仙史。真宗大谷派専念寺の住職。広瀬淡窓に漢学・詩文を学ぶ。のち田能村竹田に私淑して文人画を描き、貫名海屋・前田暢堂・日根野対山らと交わる。書にも優れた。詩書画三絶を以て称せられた。明治二十六年（一八九三）没。詩集に『五岳詩鈔』がある。

「古竹園主」（19）

『菅家物語』（三一Fiaror—102）



平間長雅（一六三六一一七一〇）

江戸時代前期・中期の歌人、国学者。寛永十三年（一六三六）浪人平間貞方の子として江戸に生まれる。名は良淳。号は風観窓、風観斎、耻山軒、六諭居士。俳号は舟岸。京都に出て鷹司家の知遇を得、日野弘資に歌学の指導を受ける。また望月長孝にも師事し、長孝没後はその二条家流歌学の秘伝書を継承した。京都歌壇の中心的存在となり、元禄九年（一六九六）京都粟田山に隠棲、のち摂津国住吉に移る。門人に有賀長伯。宝永七年（一七一〇）没。墓は京都市左京区檀王法林寺、摂津池田の久安寺、堺の宿屋町。『風観窓長雅家集』がある。

「感生志（長方印）」印と「□□□知本源豈求□□□道」印は、奥書の関防印。それ以外は、奥書の末に捺された印である。

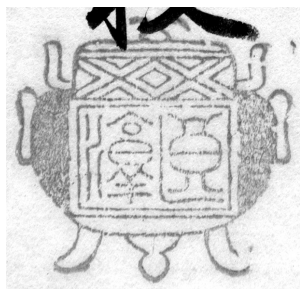
「感生志（長方印）」（45）

\*『詠歌大本秘訣』（三―F―a―へ―五二）

『古今顕昭抄』（三―F―a―へ―五五）

「感生志（方印）」（28）

『詠歌大本秘訣』（三―F―a―へ―五二）



〔長雅〕(30)

〔風觀齋〕(30)

〔古今伝受切紙口伝条々三箇之大事〕(四〇九)

〔超大極秘古今集〕(四〇一七)

〔良淳〕(35)

〔飛鳥井家伝来抄〕(VII-二-K-b-八〇)

〔詠歌大本秘訣〕(三F-a-一五)

〔古今顯昭抄〕(三F-a-一五七)

〔六喻居士〕(28)

〔秘書伝謝礼之旧記〕(I-二-C-一)

〔百人一首短冊形〕(I-二-C-一)

〔古今伝受切紙口伝条々三箇之大事〕(四〇九)

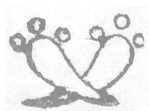
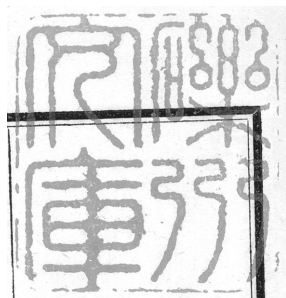
〔超大極秘古今集〕(四〇一七)

□□□知本源豈求□□□道(44)

〔超大極秘古今集〕(四〇一七)

『堯惠今案抄』は、資料中に「大坂／追手筋／折屋町／小川屋」印を捺す小紙片が挟み込まれているので、加藤景範の家に所縁のものと思われる。





松平慶永（一八二八—一八九〇）

江戸時代後期の大名。越前福井藩主。文政十一年（一八二八）田安斉匡の八男として江戸に生まれる。越前守。名は慶永。幼名は錦之丞。字は公寧。号は春嶽、礫川、羊堂、栄井、渚鷗、慎独斎、吹蘭閣主人、潜思閣主人、東郭、鴨東。天保九年（一八三八）松平齐善の嗣子となり越前国福井藩主を襲封。有能な家臣に恵まれ藩政改革に成功し、種痘法の採用など洋式技術の導入に治績をあげた。大老井伊直弼と対立、隠居・謹慎を命ぜられたが、文久二年（一八六二）政事総裁職となり政界に復帰、将軍後見職の一橋慶喜とともに公武合体に尽力した。のち朝議参与、京都守護職を歴任。維新後は議定・内国事務総督・民部卿・大藏卿・大学別当を歴任。明治三年（一八七〇）一切の公職を退き文筆に日を送る。詩や和歌もよくした。明治二十三年（一八九〇）東京に没す。東京品川 の海晏寺墓域。歌集に『衣更着集』『常盤集』などがある。

掲出書は山本達郎旧蔵の越南本である。

『養賢堂』（42）

『大越史記外紀全書』（Y-X-二一五）

『礫川文庫』（37）

『大越史記外紀全書』（Y-X-二一五）

『「違い丁子」(絵)』（12）

『大越史記外紀全書』（Y-X-二一五）



森川竹磔（一八六九—一九一七）

明治・大正期の漢詩人。明治二年（一八六九）東京に生まれる。名は鍵、鍵蔵。字は雲卿。号は竹磔、鬢糸禅侶。家号は聴秋仙館、懺綺盒、窠莊館。森槐南に詩を学ぶ。鷗夢吟社に参加し、機関誌『鷗夢新詩』の編集発行に携わる。また雑誌『詩苑』を創刊する。大正六年（一九一七）没。著書に『得間集』がある。

「窠莊館森川氏藏書記」（38）

『国史攬要』（X—五—B—一〇二七）



#### 冷泉家

鎌倉時代以来の和歌の家の一つ。藤原氏北家御子左家の流で、藤原定家の孫為相を祖とする。家格は羽林家。平明で清新な歌風を唱えた。為相の曾孫のとき、上冷泉・下冷泉家に分かれた。江戸時代の上冷泉家の家禄は三百石で、明治十七年（一八八四）に伯爵となる。他方、下冷泉家の江戸時代の家禄は百五十石で、明治十七年子爵となる。嫡流である上冷泉家は俊成・定家以来の貴重な古典籍多数を伝えており、その大半を歌書が占める。昭和五十六年（一九八一）財団法人冷泉家時雨亭文庫が設立された。

「冷泉府書」（45）

『天運紹統』（XI 四一B 一四）